

初空襲を受けた日

元澤義治

本町一丁目

その日、昭和十七年四月十八日、私は本郷連隊区司令部からの赤紙（召集令状）によって千葉県・習志野二の宮町の東部石井部隊（後に東部第十九部隊）に入隊することになった。当日は現在地（本町一―八―三）の家から新宿駅まで在郷軍人会の成願寺副住職長谷川少尉やラッパの伊藤の春さん等が青梅街道に行列をつくって送ってくれた。

軍隊とはどんな所か、戦争とは、海外の野戦へはいつ出征させられるのか、万歳万歳と歓呼の声で送られてはみたものの、恐怖心と不安と寂寥感で胸がいっぱいであった。頭髮と爪と遺書を封筒の中に入れて門出の時に母に渡して来たが、これが一生の別れになるのかと思うと、駅前で見送りの人達に御礼の辞を述べる時も涙が出た。体重が四五キロしかない痩せっぽちの私を父ははじめに思ったのかどうか、習志野の部隊までついて来てくれた。営門を入ると召集兵は次から次へと広い営庭に集められた。四百人位はいたろうか。そのうち空襲警報のサイレンが突然けたたましく鳴り響いた。私達は私服で奉公袋を下げ

たままだだ呆然と立ちつくしていたが、動員室の下士官らの誘導によって全員営庭の松林の中に待避させられた。

空襲警報のサイレンは聞いたが、敵機は一機も見なかったし、これを撃つ高射砲の音も聞こえなかった。ただ部隊の中は、鉄帽をかぶり三八式歩兵銃を持った兵が、兵舎から蜂の巣をつついたように飛び出して来て走り回ったり、トラックが何台も車廠から出て営門の方に向かっていくのを見た。今どういう状況なのか、これから私達はどのようなのか、応召兵達はおろおろして誰も口をきく者もなく、松林の中で立ちすくんでいた。

もう正午を過ぎていたのであるのか、顔位の大ききのコッペパンが一つ一つ配られた。これが軍隊の昼食の食べ始めであったが、水も菜もなくとても口にするには出来なかった。捨てることもできずに二、三日軍服の物入れにかくし持っていたことを今も記憶している。午後になってから、私達は医務室で一人ひとり身体検査をされた。禪ふんどしをはずした裸の男らが行列をしている風景は異様であった。この時、帰郷を命ぜられた者は一

人もいなかったように思う。左の眼がつぶれていても右の眼一つ開いていれば鉄砲は撃てるという訳か、合格となった。右手の人差し指を切断して応召をのがれようとした青年がいたが、自動車の運転やラップを吹くには支障はないといって衛生兵に往復ビンタを喰らって、これも痛い思いをした甲斐もなくパサさせられてしまった。

私は、五中隊五班に配属された。洗いざらしの木綿の軍衣袴に着がえをして、略帽をかぶり営内靴（ゴムのサンダル）を履いて、酒保で待っている父のところへ私服と奉公袋を家に持って帰るように届けにいった。

この日の空襲はあとで分かったことだが、犬吠岬の東七百海里、ハルゼー中将指揮の米空母ホーネットからドゥリットル中佐の率いる陸上中型爆撃機B25十六機の編隊による空襲であった。東京・横須賀・名古屋・神戸を奇襲爆撃したうえ、そのまま中国大陸・ソ連沿海州へ飛び去っていったということだ。（江口圭一著「十五年戦争小史」より）

私はこの部隊に敗戦の八月十五日まで三年半ばかり一兵卒として勤務した。その間、空襲に対処して「対空攻撃班」が組織されたが、兵器は各中隊、重機関銃がたったの一丁あるだけであった。それを兵舎の二階の屋根、営庭に銃座をつくり重機をそなえる。これで米のB29や艦載機グラマン等を撃ち落とそうというのだから実に情けなくなってしまう。

話を戻そう。今は亡き父だが、当日、心の中では私の即日帰郷を望んでいたのではなからうか。世間知らずでひ弱な一人の子の私が、哀れでならなかったのではないかと思う。私の私物をかかえて無言で酒保から営庭を突っ切って去っていった亡き父の面影が、今でも瞼の奥に焼き付いている。